道徳授業の大転換を

豊島区教育委員会教育長　三田　一則

豊島区立要小学校が平成 29･30 年度豊島区教育委員会研究推進校として、「特別の教科道徳」の先行研究として熱心に取り組まれたことに、深く敬意を表します。

小学校においては今年度から「特別の教科道徳」が全面実施となりました。道徳の教科化の背景には、いじめ問題等への対応があります。豊島区の子供たちが、いじめの加害者にも、被害者にも、傍観者にもならない、芯の強い子供を育てるため、道徳授業の質的転換が求められています。具体的には、発達段階に応じ、答えが一つでない道徳的な課題を、児童一人一人が自分自身の問題として捉え「考え、議論する道徳」への転換が必要です。本校は研究主題を「『こんな人になりたい』『こんな生き方をしたい』とともに考え認め合う」として、道徳授業の改善・充実に取り組んでこられました。授業において資質・能力を育てるために、何を学習させるかが重要です。本校では、ねらいを明確にし、教材の提示や話合い、発問などの指導方法の工夫・改善を進めています。学習過程の中に、自己を見つめる場面を設定し、「要スタイル」の授業を考案しています。これは「チーム要小」としての組織力の高さを表したものです。また、タブレット型 PC を活用した「e-ポートフォリオ」によって、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握されてきたことは、児童の変容に着目するよりよい評価の手だてとして有効であります。

今後、要小学校における研究成果を区内各学校での道徳授業の改善や、道徳教育のさらなる充実に生かされ、豊島区の子供たちの道徳性に磨きがかかりますことを心より期待しております。

結びになりますが、本研究の推進にご尽力いただきました 川合　一紀 校長先生をはじめ、教職員の皆様に深く感謝を申し上げます。同時に温かいご指導をいただきました講師の皆様に厚く御礼申し上げ、挨拶といたします。

はじめに

校長　川合　一紀

本校では、学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の要となる道徳科の授業において、発問の工夫や、言語活動（話合いの工夫・書く活動の工夫）の充実を図れば、自他を大切にしながら主体的に行動し、よりよく生きようとする児童が育つであろうという仮説のもと、「こんな人になりたい「こんな生き方をしたい」とともに考え認め合う～考え、議論する道徳に向けた授業改善と評価の工夫～と主題を設定し取り組んで参りました。

道徳教育の目標は道徳性の育成です。道徳性とは人間が生まれもっているよりよく生きようとする内面の資質です。これは善と悪とを正しく判断し、善を喜び積極的に行い、悪いことにはブレーキをかける力と言えるでしょう。それを育てるために私たちは、高い教師の授業力と適切な評価が必要不可欠であると考えます。授業改善にあたっては、教科書をどのように活用するか、考え議論する授業展開をどのように組み立てるかなど、教師の指導観が重要な意味をもちます。また評価についても、毎時間の道徳の評価をどのように録り溜めていくか、それをどのようにまとめるかも日々の授業に忙殺されること無く着実に行える手法が必要なのです。本日はここに「考え、議論する道徳」の授業スタイルと評価方法の工夫についてご報告いたします。

結びに、長きにわたり本校の研究を導いて下さった聖徳大学大学院教職研究科　教授 吉本恒幸先生に感謝を申し上げるとともに、ご支援賜りました豊島区教育委員会教育長 三田一則様をはじめとする豊島区教育委員会事務局の皆様に心より感謝申し上げます。

1　研究の全体構想

児童の実態（アンケート調査より）
・学年が上がるに従い「よりよく生きるための方法が分かってきた」の割合が増加している。
・友達の考えを参考に自己を振り返ることに課題が見られる。

学校教育目標
「当たり前のことを当たり前にできる子」
～知・徳・体のバランスの取れた児童の育成～
・健康でたくましい子
・思いやりの心をもち協力する子
◎よく考え進んで学ぶ子

社会的側面
・道徳の教科化全面実施

学校評価より
・「正しい言葉遣いができている」「自己肯定感が高い」に関して、肯定的意見がともに６５～７０％程度である。

＜ 道徳教育の重点目標 ＞　●協働と自律と創造に基づく全人格教育

・特別の教科道徳の授業を基盤として、全教育活動を通して心を育て、人間性・社会性を身に付けさせる。
・挨拶、返事、マナーなどの礼法の指導を徹底し、よりよく生きる術を身に付けさせる。
・人権尊重の精神を理解し、思いやりの心をもって他者と共によりよく生き抜くために協働の精神を育む。
・社会の変化に対応し、その形成者として自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動するための自律の精神を養う。また、社会事象や身の回りの事物に主体的に働きかける創造の力を育む。

＜ 目 指 す 児 童 像 ＞

すずかけ
◎よいことと悪いことの区別ができ、正しいと判断したことを進んで行うことができる児童
・身近にいる人に親切にすることができる児童
・みんなの役に立つことを進んでできる児童

低学年
◎よいことと悪いことの区別ができ、行動できる児童
・気持ちの良い挨拶や言葉遣いなど礼儀を身に付け、身近にいる人へあたたかい心を接することができる児童
・約束やきまりを守ることができる児童

中学年
◎自分の考えや意見を相手に伝えるとともに相手のことを分かろうとし、自分と異なる意見も大切にできる児童
・相手のことを思いやり、進んで親切にできる児童
・正しいと判断したことに自信をもって行うことができる児童

高学年
◎自分と異なる意見が立場を尊重し、自分の考えや意見を相手に伝え、互いに認め合うことができる児童
・思いやりの心をもち、相手の立場を考えて進んで親切にできる児童
・みんなの役に立つことを進んで行うことができる児童

＜ 研　究　主　題 ＞

「こんな人になりたい」「こんな生き方をしたい」と ともに考え認め合う
～考え、議論する道徳に向けた授業改善と評価の工夫～

＜ 研　究　仮　説 ＞

学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の要となる道徳科の授業において、
発問の工夫や、言語活動（話合いの工夫・書く活動の工夫）の充実を図れば、
自他を大切にしながら主体的に行動し、よりよく生きようとする児童が育つであろう。

＜研究の視点１（授業改善）＞

●道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を目指して
◎教材を提示する工夫　◎発問の工夫　◎話合いの工夫　◎書く活動の工夫
・動作化、役割演技など表現活動の工夫　・板書を生かす工夫　・説話の工夫
※◎は重点項目

＜研究の視点２（評価）＞

●児童の学習状況を適切に記録する評価を目指して
・授業中、児童の学習状況を即時記録できるタブレット端末用ソフトの開発（e-ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ）

＜研究の方法１（授業改善）＞

●次に記載する機会を中心として、日常的な授業改善を図る
・校長による授業参観と事後指導（全員各学期１回以上）
・各分科会による研究授業を実施し、教員全員での検証
・一人１回実践授業を実施、並びにＯＪＴ委員会を中心に授業を見合う機会の確保
・道徳教育推進教師及び研究推進委員長の授業公開、並びに出前授業、ＴＴの実施

＜研究の方法２（評価）＞

●ＴＴで記録を蓄積する
・学級担任の日常的な e-ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵの記録
・左記のＴＴ実施時にＴ２による詳細な記録の蓄積

＜教育活動全てを通して行う道徳教育＞

・各教科指導　・外国語活動　・総合的な学習の時間　・特別活動（学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事）

＜本 校 の 特 色 を 生 か し た 取 組＞

・挨拶、返事、マナーなどの礼法の指導　・毎時間の呼吸タイム　・朝の挨拶運動　・道徳授業地区公開講座
・ｈｙｐｅｒＱ－Ｕの活用（自己肯定感の見取り、座席への活用等）

2　要スタイル（授業改善・話合いの工夫を例に）

本校では「考え、議論する道徳」を「道徳的価値を自分事として捉えて考え、話合いを通して自分の考えを深めていく道徳」と捉えました。

すずかけ分科会・低学年分科会・中学年分科会・高学年分科会それぞれで「話合いのスタイル」を作り、話合い活動を通して多面的・多角的に考える中でも、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めることができるよう授業改善を図りました。

すずかけ分科会

「同じ考え」「違う考え」カードを提示することで、友達の考えを自分の考えと比べながら聞く。話合いを通して、多面的・多角的なものの見方や考え方に触れる。
★キーワード「自分の考えのよさに気付く。」

①自分で考えよう

②自分の考えをもとに話し合おう

③自分の考えと比べながら友達の考えを聞き「同じ考え」「違う考え」カードで伝えよう

低学年分科会

「お話玉方式」の話合い活動で、自分の考えを伝え、友達の話を聞く機会を確保することで多面的・多角的なものの見方や考え方に触れる。
★キーワード「話をつなぐ。」

①自分で考えよう

②自分の考えを伝えよう

③友達と自分の考えを比べよう

中学年分科会

波紋型・相互指名方式の話合い活動で自分と同じ考えだけでなく付け足した考えや違う考えがあることに気付かせ、自分の考えを広げていくことができるようにする。
★キーワード「思いや考えをつなぐ。」

①自分で考えよう

②自分の考えを伝えよう

③友達と自分の考えを比べよう

④考えをつないでまとめていこう

高学年分科会

「ワールドカフェ方式」の話合い活動で、自分の考えを伝え、友達の話を聞く機会を数多く確保することで多面的・多角的なものの見方や考え方に触れる。
★キーワード「つないだ考えを広げ深める。」

①自分で考えよう

②自分の考えを伝えよう

③友達の考えを聞いて、深めよう

④考えを振り返ろう

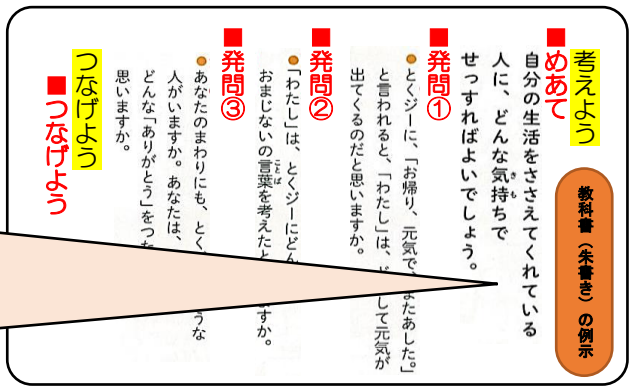
3　要スタイル（授業改善・教科書の活用を例に）

豊島区が採用している「光村図書出版株式会社」道徳科の教科書では、発問例・学習過程が丁寧に示されています。それらをよりよく活用するために、本校では次のように考えました。

1　発問構成についての考え方を、３年生「とくジーのおまじない」を例に説明します。

朱書き本や指導書に書かれている「■めあて」の箇所は、学習過程の「道徳的価値を捉える発問」あるいは「自己を見つめる発問」のどちらかに当たります。

三年生「とくジーのおまじない」を例に考えると、本教材の「■めあて」は、道徳的価値を捉える発問として考えられるので、下表のような学習過程となります。



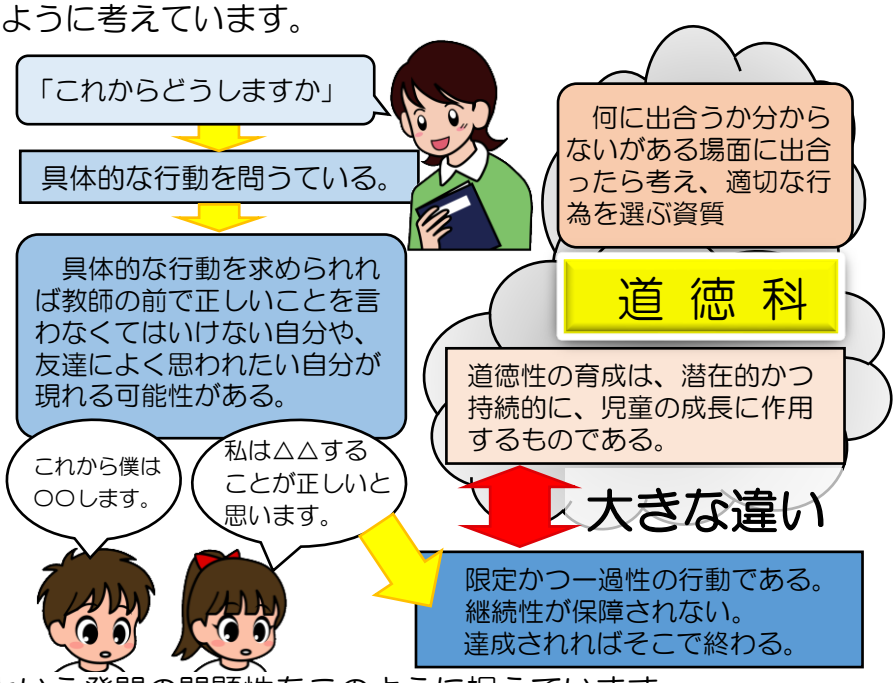
気付く	発　問　構　成
深める	○基本発問（発問①） とくジーに、「お帰り、またあした。」と言われると、「わたし」は、どうして元気が出てくるのだと思いますか。 ◎中心となる発問（発問②） 「わたし」は、とくジーにどんなおまじないの言葉を考えたと思いますか。
つかむ	○道徳的価値を捉える発問（めあて） 自分の生活を支えてくれている人に、どんな気持ちでせっすればよいでしょう。
見つめる	○自己を見つめる発問（発問③） あなたのまわりにも、とくジーのような人がいますか。あなたはその人にどんな「ありがとう」をつたえたいと思いますか。
つなげる	

2　本校の「つなげる」について、次のように考えています。

終末「つなげる」は、思いや考えをまとめる時間、自己（人間）の生き方を考える時間として捉えています。

「自己の生き方についての考えを深める」は自己を見つめる過程で深めていくものであるため「自分ならこうする。」「これからはこうしていく。」という考えのみに捕らわれるべきものではないと考えました。

伸ばしたい自己を深く見つめ、これからの生き方の課題を考え、それを生き方として実現していこうとする思いや願いを深める時間にしたいと願っています。「これからどうするか」という発問の問題性をこのように捉えています。



４　評価（e-ポートフォリオからあゆみまで）

１　道徳科の評価の根拠

小学校学習指導要領
「第３章　特別の教科　道徳」「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の４
　児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

　学習における評価とは、児童にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである。
小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」第５章　第１節の２　道徳科における評価の意義
　教師は道徳科においても（中略）それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切である。

２　本校における評価の考え方

小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」
第５章　第２節の２(1)道徳科に関する評価の基本的な考え方
（前略）その際、個々の内容項目ごとではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価とすることや、他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うことが求められる。
（中略）道徳科の学習状況の評価に当たっては、道徳科の学習活動に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要がある。こうしたことを踏まえ、評価に当たっては、特に、学習活動において児童が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが重要である。このことは道徳科の目標に明記された学習活動に着目して評価を行うということである。道徳科では、児童が「自己を見つめ」「多面的・多角的に」考える学習活動において、「道徳的諸価値についての理解」と「自己の生き方についての考え」を、相互に関連付けることによって、深い理解、深い考えとなっていく。こうした学習における一人一人の児童の姿を把握していくことが児童の学習活動に着目した評価を行うことになる。
※下線部は本校研究推進委員会による

　上記の小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳」の趣旨を本校では次のように整理しました。

大くくりなまとまりを踏まえた評価 ⇒ 教材は多様な価値をもつことから、教材名で記述する。
一定の時間的なまとまりの中で ⇒ 学期あるいは年間を通しての一人一人の取組の様子を記述する。
自律的に思考する ⇒ 特に顕著と認められる点が発揮されている様子を記述する。

「道徳的諸価値についての理解」と「自己の生き方についての考え」を、相互に関連付けること
一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

３　あゆみの記述の構成（２文で構成）

大きなくくりでの学習への取り組み方の様子～１学期の間に見られた学習の様子について～
・道徳的価値に迫り、捉えていく様子から、自分のこととして考えていたか。
・一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展していたか。

「特に」「中でも」「とりわけ」などの接続語を使って文をつなぎます。

特に顕著と認められる点が発揮されている様子~ワークシートやe-ポートフォリオに書かれている内容から具体的な学習の様子~
・道徳的価値の理解を基にどのように自己を見つめたか。
・人としてよりよく生きるために、これからの生活について考えたか。

4　「e-ポートフォリオ」の活用による評価のイメージ

e-ポートフォリオ内の評価チェック項目

話合い活動中の学習状況
□対話を通して、様々な意見があることを認めている。
□友達の考えや気持ちに共感している。

価値理解に関する学習状況
□道徳的価値の理解につながる発言・記述をしている。
□自分事として考えている。

自己の振り返りに関する学習状況
□自分の生活と関連させて具体的に自己を振り返っている。
□これからの生き方について考えている。

＋

e-ポートフォリオ内の教師による記述

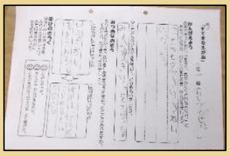
先生のあらすじに興味をもっている。

話し合いをまとめ、前向的に友達の意見をとらえていた
友だちの意見をきいて自分の考えを深めている

友だちの話を聞いて同じであると共感していた
↓認めた。
自分の考えのよさに気付いた。
みんなと楽しく給食を食べるのが好き。

＋

ワークシートの記述内容（児童）



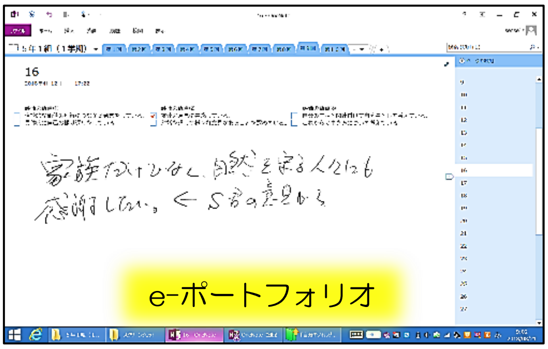
↓

学習状況の記録の蓄積

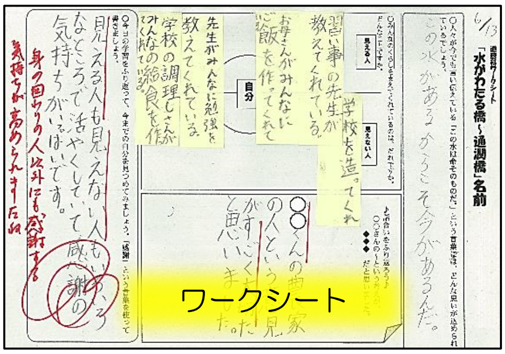
〰〰〰の部分がワークシートの記述、他が e-ポートフォリオから

・「○○○（教材名）」の学習では、教材のあらすじに興味を持ち、登場人物の気持ちに自分を照らし合わせながら学習した。主人公の強い決意に共感し「○○・・・・・・・・○○」と日頃の生活を振り返った。
・「○○○（教材名）」の学習では「○○○・・・○○」という友達の話を聞いて共感するとともに、自分の考えのよさに気付いた。その結果、「これからは○○○したい。」と自分の生き方について記述した。

5　「e-ポートフォリオ」評価の実際（第５学年１組の事例）



＋



実際の評価文例（あゆみ）

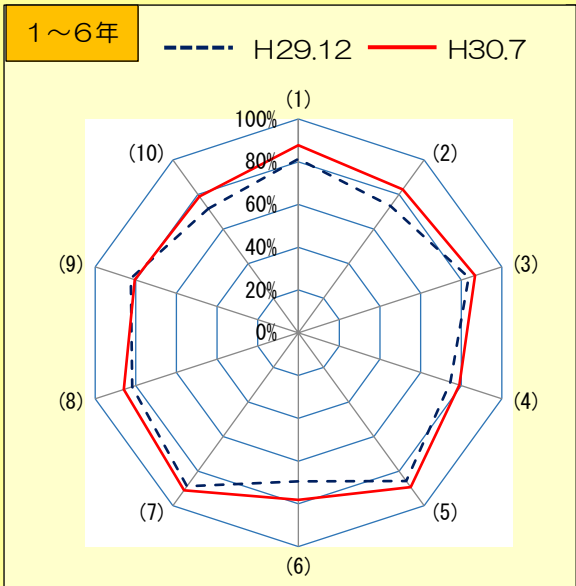
Ａ 児：どの教材でも友達の考えに共感しながら話を聞き、考えを深めている姿勢が素晴らしいと思います。特に「通潤橋」の学習では友達の意見を聞き、身近な人だけでなく自然環境を守っている人に感謝したいと考え、ワークシートに自分の考えをまとめることができました。

6　１学期のあゆみの記述例

視　点　１	視　点　２	記　述　例
大きなくくりでの取り組み方の様子	道徳的価値に迫り、捉えていく様子から、自分のこととして考えていたか	「（生命尊重の教材名）」や「（家族愛の教材名）」の学習では、家族を大切に思う発言や記述が幾度となく見られました。
	一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展していたか。	多くの教材で自分の考えをしっかりもつとともに友達の考えに関心をもって、「なるほど」「その考えもいいな」とつぶやいていました。
特に顕著と認められる点が発揮された様子	道徳的価値の理解を基にどのように自己を見つめたか。	「（教材名）」では、伝統が長年受け継がれてきた背景には、生活をよりよくしていこうという先人の知恵が受け継がれていることに気付き発表しました。
	人としてよりよく生きるために、これからの生活について考えたか。	「（教材名）」の学習では、登場人物の強い意志に共感し、自分だったらどう生きるのかを考え発表しました。

5　意識調査の結果、成果と課題

1　児童への意識調査の結果と変容（詳細は研究紀要３７～３９ページ参照）



～質問項目～
（１）道徳の勉強は好きだ。
（２）道徳の授業で、自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞いたりすることが好きだ。
（３）道徳の学習をして、大切な考え方が分かったことがある。
（４）道徳の学習をして、自分のよさや課題について考えたことがある。
（５）友達の考えを聞いて「その考えは分かる」「そんな考えもあるんだな」などと思ったことがある。
（６）友達の考えを参考にして、自分の生活について振り返ったことがある。
（７）自分とは違う意見の人の話もちゃんと聞いて、認めることができる。
（８）道徳の学習で、自分がよりよく生きていくためには、どんな行動をすれば良いかが分かってきた。
（９）友達と話し合ったり議論したりすることで、良い考えや新しい考えがうかんだことがある。
（10）道徳の学習を通して、学習したことを実際の生活に生かそうと思ったことがある。

～自由記述（抜粋）～
（８）道徳の学習で、自分がよりよく生きていくためには、どんな行動をすれば良いかが分かってきた。
【低学年】すてきな笑顔で笑ったりしていなかったから、次から笑おうって思いました。
【中学年】ルールがあった方が楽しいこともあるから、ルールを守っていきたい。
【高学年】友達とのつき合いの中で、相手の気持ちを考えたり自分の意見を押しつけたりしないようにする。
（９）友達と話し合ったり議論したりすることで、良い考えや新しい考えがうかんだことがある。
【中学年】言いたいけれど言えないとき、どのように言えばよいか、友達の考えを聞いて気付くことがありました。
【高学年】ワールドカフェ方式で話し合うと、相手に賛成したり反対したりして、どんどん考えが浮かんできます。
（10）道徳の学習を通して、学習したことを実際の生活に生かそうと思ったことがある。
【高学年】「みんな、おかしいよ！」の学習で、自分の思いを伝えることの大切さを知り、そのことを実際に生かしたら（友達との）仲が深まりました。

2　成果と課題

（１）成果　　２年間の本研究を通した合い言葉は「教師が変われば、子供が変わる」であった。児童への意識調査の結果から、このことを実感できる。「教師が変われば、」言葉の意味は分かるが、具体的には何をどのように変えればよいのか。私たちが悩み挑戦してきたことが、児童の道徳性の成長という長い期間でしか捉えられない成果につながるとともに、そのゆるやかな成長を適切に見取る児童理解・授業力につながり始めている。

（２）課題　　道徳科の授業をしていると、教師が価値観を押しつけているつもりはなくても、教師の価値観が授業に強く影響することがある。こだわりが学習過程の柔軟性をなくす時がある。そのような時、児童の反応などからそれらのことに気付き、自らの指導を即座に修正する感性を身に付けたい。

ご指導いただいた講師の先生

聖徳大学大学院教職研究科　教授　吉本　恒幸　先生

研究に携わった教職員

省略